

フィクション鑑賞における意識の問題

石田尚子*

Some issues of our appreciating fictional works

ISHIDA Naoko

Abstract

The purpose of this study is to show the way we appreciate fictional works by modifying Paskow's "Realist Theory". Paskow presents Realist Theory to solve "the paradox of fiction", which puts a question why we have emotional responses to fictional objects. In Realist Theory, our consciousness is separated in two parts. By consciousness 1, we truly believe in fictional beings, and by consciousness 2, we deny the existence of such objects. Paskow says that this is why we have emotional responses to fictional objects without confusing reality and fiction.

But there are two problems. First, we can't identify fictional beings in Paskow's view. Second, it is not clear why the consciousness 2 can emerge.

Paskow's theory may be modified from the view of our psychic functions. I argue that what Paskow calls "consciousness 1" is the mental functions to appreciate fictional works, and "consciousness 2" is metacognitive regulation. We believe in fictional beings when we are engaged in appreciating fictional works, but metacognitive regulation denies that belief. This is why we have emotional responses to fictional beings without confusing reality and fiction.

Keywords: analytic aesthetics, fiction, fictionalism, emotion, paradox of fiction

1. はじめに

本稿の目的は、小説や絵画・映画・漫画などのフィクション作品を鑑賞する際の、鑑賞者の意識の働きを解き明かすことである。そのために、特にパスコーによる实在主義者の理論 (Realist Theory) を検討し、その修正提案の方向を示したい。

实在主義者の理論は、「フィクション作品を鑑賞する際、なぜわれわれは虚構上の存在に情動を抱くのか？」¹ という、分析美学において長く議論されてきた「フィクションのパラドックス」への解決案の一つである。例えば「友人の姉が病気になった」と聞いてその友人の姉を心配するのは、対象となる人物が実在すると信じているからであり、もし友人に姉などいないと判明したなら、先ほどまで抱いていた「心配」という情動は消えてしまうだろう。しかしフィクション作品の鑑賞の際には、われわれは (現実には) いないと知っている架空の存在に情動をもつ。なぜこのような現象が起こるのかについて、情動に関する認知主義的見解に立ち² 定式化したのが、以下の三つの命題である。

- (A) われわれはフィクションに登場する人物・出来事・状況に関して情動をもつ
- (B) ある対象に情動をもつためには、その対象の実在を信じていることが不可欠である

キーワード：分析美学、フィクション、虚構論、情動、フィクションのパラドックス

*平成23年度生 比較社会文化学専攻

(C) われわれはフィクションに登場する人物・出来事・状況は（通常は）実在しないと考えている³

上記の命題は単独では正しいと思われるが、すべてを受け入れた場合「われわれはフィクションに対して情動をもつと同時に持ってない」と主張することになり、明らかに矛盾する。ゆえにこの解決のためには、三つの命題のうち少なくとも一つを否定しなければならない。このパラドックスにはこれまでに多くの解決法が提示されてきたが⁴、パスコーは、命題(C)を部分的に否定する方策をとる⁵。すなわち、フィクション作品を鑑賞する時、われわれはそこに登場するフィクショナルなキャラクター（すなわち虚構上の存在）を一時的に「精神の外部に実在するとみなしている」⁶、「論理的に完全な実体だと思っている」⁷と指摘するのである。そしてわれわれの意識は、先述したようなフィクション作品に没入した意識と、一方で作品内容をあくまでも架空であり単なる表象であると判断する別の意識とに二分されており、それらが交互に現れることによって、フィクション作品の鑑賞行為が行われるのだとパスコーは述べる。

上記のパスコーの理論はフィクション作品がもつ両義性、すなわち、時にすべてを忘れて没頭できるような存在でありながら、決して現実ではないという点を率直に表現したものであるが、問題点をも含んでいる。その中から、本稿では問題点として次の二つを挙げる。第一に虚構上の存在をめぐる同一性の問題、第二に意識の切り替わりの問題である。これら二点の問題に対する修正案を提案し、さらにフィクションの鑑賞行為における意識の働きについて、メタ認知の観点を踏まえて私見を述べるのが、本稿の結論である。

2. 実在主義者の理論

はじめに、実在主義者の理論について詳述する。この理論では、先述の通り、フィクション作品の鑑賞時に、鑑賞者の意識は二つに分けられているとされる⁸。

例えば、ある映画作品の鑑賞に没頭している時を考えよう。その映画の鑑賞中、われわれは映画の登場人物が話す言葉を聞いて「電気信号で再生された音だ」と思わずにその人物が「喋っている」と思うだろうし、その人物が（映画の作中で）立つ場所も「スクリーンに写っている単なる像だ」とは思わず、当該人物が「あの場所に立っているのだ」と思うだろう。だが同時に、われわれはその登場人物を日常生活における知人と同じ存在だとは思わないし、フィクション内の世界に自分が影響を与えようとしても不可能であることも理解している。つまりわれわれは、その作品を何か意味のあるものだと思ってのめり込む、すなわち没入する意識とともに、目の前のものが何かを表象する作品であると認識する意識をももつといえる。パスコーの理論は、これらをそれぞれ意識（consciousness）1、意識2と名付ける。すなわち意識1は信じやすく、作品の内容に没入している。意識1において、われわれは（作品の登場人物や事物などの）虚構上の存在を、「志向的な対象」⁹として「論理的に完全なものであり、私たちから独立して」¹⁰おり、作品で「描写された副世界（subworld）」¹¹の中に実在する（実際に存在する）ものと考えている。つまり意識1は、先述したフィクションのパラドックスの命題(C)「われわれはフィクションに登場する人物・出来事・状況は（通常は）実在しないと考えている」を否定するものである。だがその一方で意識2は、「他者」が世界をどう見るかという三人称的視点で世界を見ており、私たちの情動や鑑賞行為への参加具合を評価し、意識1によるさらなる没入を許可、あるいは却下する。この二つの意識の関わり合いによって、作品は鑑賞されるのだという。

この説に基づいて実際の鑑賞行為の内容を分析すると、以下のようになる¹²。例えばフェルメールが描いた少女の絵を見た時、まず鑑賞者は絵の中の少女を見て、その少女が絵で描写された世界の中に実在するものとして捉え、「繊細そう、優しそう」と考える。そして喜びや親しみなどの情動をもつ。これが意識1の働きである。次に、意識2が「自分が見ているのは単なる絵であり、少女は表象に過ぎない」と判定し体験を部分的に否定する。この働きにより、鑑賞者は架空と現実を混同するような不合理な状態に陥らずにすむ。だが意識2が働いた後も、意識1による判定（「繊細そう」「優しそう」）や、鑑賞による情動は残り続ける。このように意識1と意識2が双方働くために、われわれはフィクション作品を鑑賞して情動を抱きながらも、それを現実と誤認はしないのだとパスコーは述べる。

だがこの説明に対しては、想定されうる反論が二点ある。一つは「異なった二つの意識を持つのは矛盾しているのではないか」という反論、もう一つは「虚構上の存在が実在するかのように見て情動をもつという説明は、

ウォルトンによるメイクビリーブ理論と同じではないか」という反論である。ここでは、一章で述べた本稿の指摘する問題点とは別に、まずこれらの反論について、パスコーの主張に依拠する形で再反論を行う。

第一に、二つの意識の矛盾についてである。パスコー自身、この点については自ら再反論している。パスコーによれば、二つの意識を持つことが矛盾となるのは、まったく同一の行為者が一度に、同じ時にフィクション内の存在を信じ、かつ信じていないと主張する時である¹³。先ほどのフェルメールの絵の鑑賞例にあるように、ここでは二つの意識は同時に現れない。あくまでも、意識1から意識2へとというように切り替わりが起きているだけなのである。このことからパスコーは、本理論は矛盾を含まないとしている。

だがはたして、こうした意識の切り替わりは何をきっかけにして発生するのだろうか。パスコーは意識1の後になぜ必ず意識2が働くのかについて、明確な説明を行っていないように見受けられる。したがって切り替わりのメカニズムそのものへの説明には、理論的な修正が望まれる。この点については、本稿の四章で詳述する。

しかしながら一方で、こうした意識の「切り替わり」そのものが必要なのかという反論も考え得る。つまり、虚構上の存在の存在を信じる意識1を設定するのではなく、「架空の存在は実在しない」と考える日常の感覚が、フィクション作品の鑑賞の際にだけ「不活性になっている」¹⁴と考えればよいのではないかという考えである。まさにこのように、精神の状態に影響を与える信念の幅の中に、活性なものと不活性なものがあると述べているのはヤナルである。鑑賞者は、作品内の虚構上の存在が実在していると普段は信じていない（否定的信念を抱いている）が、鑑賞時にそれを不活性化させる。つまり（実在主義者の理論と同じく）パラドックスの命題(C)を考慮しない状態に自らを変化させることで、鑑賞行為によって情動を抱くのだとする。そしてヤナルは、われわれがフィクション作品の鑑賞時に、登場人物等の虚構上の対象が虚構であること（虚構性）より先に、対象の性質（鋭い・冴えないなど）を思考することから、この主張は正しいと認められるのだと述べている¹⁵。

この主張に対してパスコーは、ヤナルは結局のところ「なぜフィクションだとわかっているものに情動をもてるのか」という最初の問いに戻ただけだとする¹⁶。そしてさらに、「本物らしさ」つまりリアリティの側面から、ローズベリーによる議論¹⁷を援用して反論する¹⁸。例えば、悲惨で憂慮すべき内容の知らせをかつて友人から聞かされた経験があれば、その時に自分がどのような情動を抱いたか思い出してみよう。この情動を(a)とする。次に、もしいつも嘘をつく人物が、上記の経験で聞かされたものと同内容の知らせを、上記の友人とまったく同じ振る舞いをとりながら聞かせてきた場合、自分がどのような情動を抱くかを想定してみよう。この想定上の情動を(b)とする。この時、情動(b)と情動(a)は同じ内容ではない（(b)は不安等ではない）という結論に至るだろう。なぜなら、嘘つきがどんなに友人と同じ振る舞いをしたとしても、その知らせは最初から明らかに嘘だとわかるからである。そして、それとは別に、大好きなフィクションの登場人物を思い浮かべてみよう。この時に感じる親しみ等の情動を(c)とする。この時、情動(c)の強さは、心からのものという点で(a)に近いだろう。だが「嘘」に対する情動という点では同じである(b)と(c)で、なぜこのような違いが生じるのか。パスコーは、(b)と(c)の差異は、(b)の対象である知らせが明らかな嘘であるのに対し、(c)の対象である登場人物の性質がリアリティをもつ点にあるのだろう、とする¹⁹。一方でヤナルの主張では、フィクション作品におけるリアリティ、つまり現実と照らしてどうであるかという評価は、対象の虚構性より先に対象の性質を思考するために重要なものとならない。パスコーはフィクションはリアリティと結びつくからこそ重要なのだと述べ、したがって、ヤナルの主張には限界があるとする²⁰。

しかしこの再反論を経てもなお、問題点は残る。このパスコーの主張では、「リアリティのある嘘」と「フィクション作品」の違いを説明できない。例えば、ある人が友人を騙すために精巧な偽の新聞記事を作ったと考えよう。どう見ても本物の新聞記事の切り抜きにしか見えなかった場合、友人はその内容を事実だと信じるかもしれない。しかしこの時感じた（憐れみなどの）情動は、それが偽の新聞記事だと判明した瞬間に消えてしまうだろう。だが一方で、漫画の中に同じ記事が描かれていたならば、そこから生まれる情動は先ほどの偽新聞記事とは違ったものになるはずである。つまりリアリティの有無のみでは、嘘とフィクションの差異を説明できない。ではこの場合、どのように理論を修正すべきかは、後述する部分に譲る。

次に第二の反論、ウォルトンのメイクビリーブ理論と実在主義者の理論との差異についてである。パスコー自身、意識1による没入について意識2は「単なるメイクビリーブだ」²¹と判定していると述べる。このように実在主義者の理論はメイクビリーブ理論に依拠している点もあるが、しかし決して同内容ではない。比較検討のた

めに、メイクビリーブ理論について詳述する。

メイクビリーブ理論とは、フィクション作品の鑑賞行為とは作品を小道具としたメイクビリーブ、すなわち一種の「ごっこ遊び」を行うことだとする²²。例えば子どもは怪獣ごっこをする時、実際に「がー」と声を立てつつ、その声を立てる行為を怪獣が吠えることとして想像する。メイクビリーブ理論においては、フィクション作品の鑑賞行為をこれと同じように考える。すなわちフィクションの鑑賞者は、例えば小説におけるメイクビリーブでは、「文章で記述されている出来事を事実として語る語り手の報告を受けている」という想像を行っている²³。

この理論と実在主義者の理論との差異は、第一に、メイクビリーブ理論においては、「虚構上の存在が実在する」と鑑賞者は（一時的にでも）考えないという点である。この理論では、鑑賞者は「自分が小道具で表象される内容を信じている、もしくは知っている」とメイクビリーブする、すなわち「ふりをしている」。「ふりである」と明示するのはふりをすることの本質に反するため²⁴、鑑賞者は小説の内容を語る時に「小説において、ホームズはベーカー街に住んでいる」と言わずに「ホームズはベーカー街に住んでいる」と言うのである。つまりメイクビリーブ理論における虚構上の存在は、メイクビリーブによって実在するかのように扱われているのである。この点はパスコーの理論とは大きく異なる。

第二に、より大きな差異としては情動の扱いがある。メイクビリーブ理論は、鑑賞行為における情動を「疑似 (quasi) 情動と呼ぶ²⁵。ウォルトンの主張において情動とは実在の対象に向けられるものだが、虚構上の存在は非実在である。よって例えば鑑賞者がある作品の登場人物Aを憐れむ時、メイクビリーブ理論ではそれを「鑑賞者はAを憐れむとメイクビリーブする」と説明する。実在する対象でなく、虚構上の信念における対象に向けた情動であるという点で、これを「疑似」と呼ぶのである。しかしこの疑似感情については、これまでに数多の反論が為されてきた²⁶。パスコーもまた、われわれの情動を（真ではなく）メイクビリーブ内のものに留めるのが何なのか不明だと主張すると同時に、メイクビリーブ理論では、稚拙な内容のフィクション作品の鑑賞行為への説明ができないと述べる。すなわち、もし子どもが木の切り株を虚構的にクマだとメイクビリーブして遊べるのなら、大人ができの悪いホラー映画を小道具として、できの良いホラー映画を見た時と同じような影響を受けることも可能になってしまうのではないか、という批判である。結局のところ、われわれはフィクション作品を鑑賞する時に子どもほどは「ふりをする能力」をもっていないというのが、パスコーの指摘である²⁷。さらにラマルクが反論したように²⁸、われわれが自らの情動に対して系統的に誤っていると主張する点、無自覚にメイクビリーブすると主張する点、恐ろしい場面を想像することが「怖がるという想像」を導くのみである点など、メイクビリーブ理論には反直観的であるという問題点がある。一方でこうした面で、実在主義者の理論は明確である。フィクション作品に向けられた情動は、意識1が虚構上の対象の実在を信じている点で、日常における情動と同じく、疑似ではない真なる情動である（意識2で実在性は否定されるが）。この率直さにおいて、実在主義者の理論はメイクビリーブ理論よりも優れている。

以上、実在主義者の理論に対する二つの考えられる反論と、それに対する再反論を述べた。だが一章にて述べた通り、本稿では以下の章でさらに二つの新たな問題点を指摘する。

3. 虚構上の存在をめぐる同一性の問題

三章にて述べたように、パスコーは、フィクションの鑑賞行為において意識1が働いている時、鑑賞者であるわれわれは虚構上の存在について、作品で描写された副世界の中に実在する、論理的に完全な実体だと考えるのだとしている。虚構上の存在については、これまでに存在論上の議論が多く行われてきたが²⁹、ここでのパスコーの主張は他の理論とは少し異なっている。前述の通り、パスコーは、虚構上の存在が描写された副世界の中に本当に実在しているのだとは主張しない³⁰。あくまでも意識1が働いている時、鑑賞者が虚構上の存在をそのように捉えるだけなのである。こうした捉え方については、「結局のところ、心の中でそれを思い浮かべているだけではないか」、「実在するという誤認を鑑賞のたびに行うというのは不合理だ」という反論が考え得るが、パスコーは実際に何が起きているのかという三人称的な見方は問題ではないと断言した後、重要なのは、鑑賞者が一人称的な体験者としてどのように実在の人々や虚構上の存在に関わっているのかであるとしている³¹。そしてフィ

クションのパラドックスの解明を妨げているのは、三人称的な見方を追求し、一人称的な見方の実在性と意義を軽視する態度なのであると、彼は主張する³²。

そもそも鑑賞行為とは、結局のところ個人的な行為である。鑑賞して感じる楽しさや美は個人が自分で感じ取るものであり、あるフィクション作品について、唯一正解となる鑑賞態度や感想（情動）など存在しない。フィクション鑑賞のこのような面に注目したという意味でも、実在主義者の理論には利点がある。だがパスコーの意図に照らし、一人称的な体験として意識1の働きを考えても、矛盾が生じている。それは、虚構上の存在をめぐる同一性の問題である。換言すれば、ある虚構上の存在が、同一の個体であるにもかかわらず異なった描写で提示されている場合を説明できないという問題である。例えばある漫画を原作として、それを小説化したり、実写映画化したりというように、異なった媒体で表現する場合を考える。するとしばしば、登場するのは漫画と同一人物でありながら、小説や映画では原作とは異なった人物描写が行われることがある。同一の登場人物の性格や物語内での行動が違う場合や、外見が異なる場合もある。そもそも漫画が実写映画になる場合、漫画の絵柄と俳優の外見は、どのように似せても必ず差異が生じるだろう。そしてそうした派生作品を鑑賞する鑑賞者が、登場する虚構上の存在に対して情動をもちつつも、「原作と同一人物のはずなのに、性格や見た目が違う」と考えている時、実在主義者の理論ではそれに対応できない。なぜならこの理論において虚構上の存在は「論理的に完全な存在」であり、しかも作品世界が描写された副世界一つに限定されているからである。

もし「描写された副世界」が当該原作の描写とその派生作品全体の描写を含めた世界なのだとしたら、同一人物の見た目や性格、行動などが時に変化し一定しないことになるか、あるいは異なった特徴をもつ「同一人物」が複数存在することになり、不合理である。

逆に、原作では原作の描写による副世界、異なった媒体ではそれぞれの描写による副世界というように、別々の副世界に属するのだと考えると、なぜ鑑賞者が「同一人物だ」という意識をもったのかが不明になる。「これは同じ原作を元にした作品のはずだ」というように、実際に何が起きているのかを客観的に見るのは意識2の働きのはずである。もしパスコーの理論の通り、意識1が働いた後に意識2が活動するのなら、派生作品の鑑賞者はそもそも当該虚構上の存在が、何者かと「同一」の人物であるなどという考えすら持たないだろう。さらに、原作とあまりにかけ離れた内容の映画の鑑賞に鑑賞者が抵抗感を示し、鑑賞行為そのものすら中止してしまう例は容易に想像できる³³。

虚構上の存在の同一性に関するその他の例としては、漫画作品で、作者の画風の変化によって同一人物の外見描写が徐々に異なってくる場合が挙げられる。例えば連載漫画の第一回では目が口より小さく描写されていた人物が、最終回では（成長した、整形した等の描写もなく）目が口より大きく描写される、といった状況を想定できる。この場合、当該人物は鑑賞者の意識1の中で「いつのまにか目が口より大きくなった」とことになり、作品内の規定と端的に矛盾してしまう。確かに現実においては、芋虫がサナギから蝶になってもその個体を同定できるように、姿形の変化があろうとも同一視できる場合があるだろう。しかし虚構の作品の場合、同定可能か否かは作中での描写に依存せざるを得ない³⁴。原作で規定されていない変化が派生作品で提示された場合、鑑賞者は作品の規定が無効となっていると判断するため、作品への没入が停止する可能性があると考えられる。

したがって、虚構上の存在は描写された世界で論理的に完全な実在であると想定すると描写のゆらぎに対応できず、論理的な完全性を失う結果になる。考え得る修正案は三つある。一つは、意識1において虚構上の存在は論理的に完全ではないとする案である。だがそれでは、われわれはフィクションの鑑賞時に論理的に不完全な、不合理なものに対して疑問をもたずに情動を抱くことになり、パスコーの理論のもつ簡潔さが損なわれてしまう。二つ目は、意識1において虚構上の存在は、複数の作品世界である役割を演じる複数の存在の集まりであるとする修正案である。しかしこの方策は、つまるところ意識1においてはルイスの可能世界論をとることになり、可能世界論と同じ問題点に躓く。例えばサインズベリーが述べるように、「我々はホームズが物語で帰せられた性質ではない性質をもっているような世界を認めることができるだろうか？」³⁵ということになる。そこで三つ目の修正案は、意識1と意識2の順序の入れ替えである。われわれはまず意識2、つまり「これはフィクション作品だ」という意識を働かせた後で、意識1の没入に入り、最後に再び意識2を働かせるのだと考えればどうだろうか。前提として「フィクションである」という意識があるならば、意識1において虚構上の存在を論理的に完全な実体であると考えているとしても、「これは原作と同一人物である」という判断が（意識2の影響で）生

まれておかしくない。重要なのは、われわれはたいていの場合、「これはフィクション作品だ」と承知して鑑賞に入るといふ点である。この点については第五章で触れるとして、ここでの修正案は、实在主義者の理論における「意識1→意識2」という流れを、「意識2→意識1→意識2」へと変えるというものである³⁶。だがここで、第二章と同様の、意識の切り替わりのメカニズムに関する問題が浮上する。上記の修正案は意識の切り替わりを前提とするが、そもそも意識は「切り替わる」といえるのだろうか。これが本稿における第二の問題点である。

4. 意識の切り替わり

实在主義者の理論の最大の問題点は、おそらくここにあるだろう。パスコー自身は自明のものとしているようだが、なぜ意識1と意識2は（おおむねの場合適切なタイミングで）切り替わるのだろうか。そもそも意識の切り替わりとはどう考えるべきだろうか。

最初に、意識1が現れる過程について考えてみよう。第二章にてヤナルに対する反論から述べたように、あるいはそもそも实在主義者の理論から離れたとしても、フィクション作品の鑑賞者に情動が生まれる過程には、鑑賞者自身の態度のみならず、作品の質が関わってくることは明らかである。稚拙な内容の作品では本来制作者が望む情動的反応を鑑賞者から得られないどころか、鑑賞者は鑑賞をやめてしまうかもしれない。逆に、例えばリアリティに富んだ内容の作品では、それこそ作品内容が現実であるかのように没頭することもありうる。このように考えると、意識1の働きを促進する要素の一つは、作品に施された修辞、技巧の質の良さであると考えられる。また、鑑賞者の興味関心に即した内容である場合にも、意識1の働きは促進されるだろう。いずれにせよ、意識1の働きが促進される過程は上記のようにいくつか考えられうる。

しかし意識2はいかにして現れるのだろうか？ もし意識1が現れたままであれば、われわれは現実と架空の区別がつかない、不合理な状態におかれてしまうだろう。そもそもフィクションのパラドックスの解決案は命題(A)か命題(B)を否定するものが多い³⁷が、その理由の一つは、(C)を否定するには「われわれはフィクション作品を鑑賞している間、作中の登場人物等が実在すると考えている（もしくはそれらがフィクション上の人物等だと忘れている）」と主張しなければならない点である。このことは、われわれがその作品が完全にフィクションだと気付いているうえで、なおその作品に感動するということがある³⁸という端的な事実によって、しばしば論駁される。この問題点は、实在主義者の理論においては意識2の判定の後にも意識1による情動が残るといふ理由で解決されるが、しかしそれならばなおのこと、意識2が現れる原因を明らかにせねばならない。

この問題について、本稿では、われわれのフィクションへの関わり方と、メタ認知の関係によって解決する。实在主義者の理論のもつ、意識1による命題(C)の否定という利点はそのままに、修正を施すことによって、フィクションにおける情動の問題を解決し、同時にフィクション鑑賞における意識の働きの解明にも寄与したいと思う。

5. 鑑賞とメタ認知

まず再確認すべきなのは、フィクション作品の鑑賞時にわれわれが前提としている事柄、すなわち「今から鑑賞するのはフィクション作品である」といふ認識である。第三章にて述べた通り、われわれはたいていの場合、この認識があるうえで作品を鑑賞する。そもそも、もしこの認識がないのならば、フィクションのパラドックスは問題にならないはずである（あらかじめ「嘘」だとわかっているものに対し、なぜ情動をもつのかという問いなのだから）。さらに、第三章にて述べた实在主義者の理論の修正案は、フィクション鑑賞時のわれわれの意識の動きを「意識2→意識1→意識2」といふ流れにするものだった。

このことから、意識1の状態の特異性が浮き彫りになる。そもそも意識1、つまり虚構上の存在を実在すると考える状態は、三人称的に見れば不合理なものであった。対して意識2は、フィクション作品を架空のものと思え、そこに登場する人物・事物を単なる表象として見るという、一般的に正しいとされる状態である。そうすると、パスコーが主張するように意識を1と2に二分する考え自体が、問題の原因となっているのではないだろうか。意識1とは統合された一つの意識の中に多数ある心的機能の中の一つであり、また意識2とは、フィクショ

鑑賞のみならず、自らの様々な心的機能を理解するための心的機能、すなわちメタ認知と呼べるものなのではないだろうか。これが、本稿の主張である。

メタ認知とは、心理学において「自分自身の認知プロセスについての知識や信念」、「認知機能の制御」³⁹を指す。本稿では、特に自分自身の活動をモニタリングする「メタ認知的制御」⁴⁰に注目する。われわれは、何かの作業を行っている際、それに没頭して周りを気にしなくなることもあれば、逆に物音を気にして作業を中断することもある。いかに没頭していても、火急の用があればそれを中断することも可能である。これは目の前の作業に没頭する意識の心的機能と同時に、自分の置かれている状態に注意を向けている、意識下の心的機能があるからである。今「同時に」と述べたが、これはパスコーが再反論したような、二つの意識を同時にもつことの矛盾にはあたらない。なぜならここでは意識のもつ様々な機能の種類について述べているからであり、しかも実在主義者の理論における意識1と意識2とは異なり、先述した機能は並列関係にない。つまりここでは、様々な作業に用いられる様々な心的機能があるのみならず、そうした心的機能を意識の「下で」常にモニターする別の心的機能があると述べているのである。いわばパソコンのアプリケーションとタスクマネージャのような関係を、これらの心的機能はもっている。そして眼前の作業が完了すれば、当然、それに没頭していた心的機能も活動を停止する。しかし自分の心的機能を理解し、モニターする意識はいかなる時も意識下に存在する。すなわちこれが本稿でいうメタ認知であり、パスコーの意識2の正体といえるものである。

すると意識1もまた、「フィクション鑑賞」という名の作業に没頭するための心的機能の一つであると考えれば、問題は解決する。われわれは「フィクション作品で楽しむこと」「フィクション作品を理解すること」を目標として作業を開始し、それに没頭する。没頭のためには作品の質の高さが鑑賞者の期待に沿うことや、自分の興味関心に合っていることなどが条件となるが、少なくともいかなる内容の作品であれ、それを鑑賞する作業を始めた時から、われわれはそれを楽しみ理解しようと、作品内容に注意を向け、没入していく。すると鑑賞者の内側で命題(C)が完全に否定され、架空と現実の区別がつかない状態になってしまうが、その一方で、ちょうど日常において没頭していた作業を中断する時と同じように、鑑賞行為を監視していたメタ認知的制御が暗黙のうちに動き、必要ならばフィクション鑑賞の作業を止める。そのような動きの中で、鑑賞行為は「楽しむ」「理解する」という目標を達成して終わる（あるいはどうしても楽しめないと判断されれば中止される）。鑑賞行為のための心的機能は活動を終了し、しかし、メタ認知は変わらず残る。フィクション鑑賞における心的機能、すなわち意識の働きは、上記のように説明されるのではないだろうか。これが、本稿の結論である。再度纏めれば、意識1とは数ある心的機能の中の一つで、フィクション鑑賞のために用いられる機能であり、意識2とは数々の心的機能を監視するメタ認知的制御なのである。

パスコーは、意識1と意識2は元々一つの意識が二分されたものであると述べた。本稿の結論においても、一つの統合された意識が様々な機能をもつ。しかし実在主義者の理論においては、情動を「主観」一つが担っているように考えられてしまっており、これが問題であったといえる。意識1と意識2は一つの座を争う並列関係にある存在ではなく、意識と意識下の上下構造にある存在なのだ。そしてフィクションの鑑賞行為とは、日常から逸脱した作業ではなく、内容は特殊でありながらも、意識における機能区分はあくまでも日常の作業と同じなのである。われわれが夕食の調理に没頭し、しかしそれをやめることができるならば、われわれがフィクション作品の鑑賞に没頭し、しかしそれをやめることができるのも、当然なのである。

註

- 1 Radford (1975), pp. 67-93. でこの問題は提起された。
- 2 ここでの認知主義とは、情動の中心要素は認知的判断や信念によって構成されているとする立場である。Levinson (1997), Carroll (1997), ステッカー (2011) を参照。
- 3 「通常は」と述べた理由は、歴史上の出来事や実話を基にしたフィクション作品も存在するからである。
- 4 代表的な七つの解決法の概観については、Levinson (1997), pp. 22-27. を参照。
- 5 パスコーは、命題(C)を否定する論者を「実在主義者 (Realist)」と呼んだ。「実在主義者の理論」と訳出したのもこの理由による。Paskow (2004), p.42. を参照。

- 6 Ibid., p. 60.
- 7 Ibid., p. 61.
- 8 以下の議論は、Paskow (2004), pp. 61-64. を参照。
- 9 志向的な対象とは、パスコーによれば「精神の外部に実在するとみなしている意識があるものの、実際には、実在しているかもしれないしそうでないかもしれない存在」である。例として「海外に住む自分の娘」と「ゼウス」が挙げられている。海外に住む自分の娘を心配する時、われわれは自分が彼女と（物理的に）隔絶されているため影響を与えることができないが、同時に彼女のことを（当然）実在すると考えている。古代ギリシアの人々は、ゼウスが自分たちとは隔絶された存在でありながらも、ゼウスが単に彼らの頭の中にしかない存在だとは考えず、実在すると信じていた。パスコーによれば、意識1が活動する時、虚構上の存在もこれと同じだと鑑賞者は捉えるという。Ibid., p. 60. を参照。
- 10 Ibid., p. 61.
- 11 Ibid., p. 61.
- 12 以下の例はパスコーによる。Ibid., pp. 64-65.
- 13 キヴィもまた、フィクションの鑑賞において二つの異なった意識があらわれると主張する。キヴィは、図形の錯覚と同じように、小説の読者は、自分が読んでいるものはフィクションだという証拠的信念（証拠から導出される信念）を持ちつつ、同時に登場人物等は実在するという知覚的信念（錯覚に陥ってしまうような、知覚から導出されたままの信念）を抱くような、物語への没入状態におかれるのだと主張する。キヴィ自身は、二つの信念のレベルの違いを理由に、信念内容の食い違いが矛盾とはならないと説明するが、清塚は、「論理的には、二つの信念の内容は相矛盾する」と反論しており、本論も同意する。Kivy (2011), 清塚 (2012) 参照。
- 14 Yanal (1999), p. 102. を参照。
- 15 Ibid., p. 106.
- 16 Paskow (2004), p. 57. を参照。例えば虚構であることを最初に考慮しないという前提では、それを虚構と知ってなお楽しむという状況を説明できない。
- 17 Rosebury (1979), pp. 123-124. を参照。
- 18 Paskow (2004), p. 58.
- 19 Ibid., p. 58.
- 20 Ibid., p. 58.
- 21 Ibid., p. 62.
- 22 Walton (1990), 清塚 (2009) 参照。
- 23 絵画や彫刻の場合は、鑑賞者は「描写されている人物や事物に立ち会っている」想像を行うとする。
- 24 三浦 (1995), 272頁参照。
- 25 Walton (1990), pp. 241-249. 参照。
- 26 本稿で挙げるものの他に三浦 (1995), 281-283頁, Tomasson (1999), pp.94-100, Yanal (1999), pp. 49-66. など多数。疑似感情に対する反論へのウォルトン自身による再反論については、Walton (1997) を参照。
- 27 Paskow (2004), p. 52. を参照。
- 28 Lamarque (2009), pp. 215-216. を参照。
- 29 詳しくは三浦 (1995) を参照。
- 30 「虚構上の存在は非実在だが、作品で描写された世界で、様々な性質をもつことができる」とする理論には、プリーストによるマイノング主義がある。プリースト (2011), 151-154頁を参照。
- 31 Paskow (2004), p. 61.
- 32 Ibid., pp. 61-62.
- 33 例えばシャーロック・ホームズのシリーズが原作でありながら、ホームズがなんら事件の解決に寄与しない無学な浮浪者として描写される映画に対する「どこがホームズの映画化だ」という反応は妥当なものである。
- 34 例えばヒーローの変身のように作品内の描写で姿形の変化が規定されていれば、それは問題にならない。
- 35 Sainsbury (2010), p. 90.
- 36 最初から「フィクションである」と認識している点で、フィクションはリアリティのある嘘と区別される。
- 37 Levinson (1997), Lamarque (2009), ステッカー (2011), 172頁参照。
- 38 ステッカー (2011), 173-174頁参照。
- 39 コールマン (2005), 697頁参照。
- 40 同書、697頁参照。

参考文献

- Carroll, Noel. (1997) "Art, Narrative, and Emotion", in Hijort, Mette. and Laver, Sue. *Emotion and the Arts*, Oxford University Press.
- Colman, Andrew. M. (2003) *Dictionary of Psychology*, Oxford University Press. (コールマン, アンドリュウ・M (藤永保・仲真紀子監訳) (2005) 『心理学辞典・普及版』丸善出版.)
- 清塚邦彦 (2009) 『フィクションの哲学』勁草書房.
- (2012) 「実在しない事柄をよろこび、かなしむこと——フィクションのパラドックスをめぐる」『思索』第45号, 東北大学哲学研究会, 85-108頁.
- Kivy, Peter. (2011) *Once-Told Tales: An Essay in Literary Aesthetics*, Wiley-Blackwell Publishing.
- Lamarque, Peter. (2009) *The Philosophy of Literature*, Blackwell Publishing.
- Levinson, Jerrold. (1997) "Emotion is Response to Art: A Survey of the Terrain", in Hijort, Mette. and Laver, Sue. (1997) *Emotion and the Arts*, Oxford University Press.
- 三浦俊彦 (1995) 『虚構世界の存在論』勁草書房.
- Paskow, Alan. (2004) *The paradoxes of art; a phenomenological investigation*, Cambridge University Press.
- Priest, Graham. (2005) *Towards Non-Being: The Logic and Metaphysics of Intentionality*, Oxford University Press. (プリースト, グラハム (久木田水生・藤川直也訳) (2011) 『存在しないものに向かって 志向性の論理と形而上学』勁草書房.)
- Radford, Colin. (1975) "How Can We Be Moved by the Fate of Anna Karenina?", *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volume*, Vol. 49., pp. 67-93.
- Rosebury, B. J. (1979) "Fiction, Emotion, and 'Belief', a Reply to Eva Schaper", *British Journal of Aesthetics*, Vol. 19., pp. 120-130.
- Sainsbury, R. M. (2010) *Fiction and Fictionalism*, Routledge.
- Stecker, Robert. (2010) "Responding to Fiction with Emotion and Imagination", *Journal of the Faculty of Letters*, Vol.35., pp. 1-12. (ステッカー, ロバート (調文明訳) (2011) 「我々はいまなおフィクションのパラドックスに関心を持つべきなのか?」『美学藝術学研究』29号, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美学芸術学研究室, 171-193頁.)
- Thomasson, Amie. L. (1999) *Fiction and Metaphysics*, Cambridge University Press.
- Walton, Kendall. L. (1990) *Mimesis as Make-Believe on the Foundations of the Representational Arts*, Harvard University Press.
- (1997) "Spelunking, Simulation, and Slime On Being Moved by Fiction", in Hijort, Mette. and Laver, Sue. (1997) *Emotion and the Arts*, Oxford University Press.
- Yanal, Robert. J. (1999) *Paradoxes of emotion and fiction*, Penn State Press.